

## 第30回史料保存利用問題シンポジウム 開催要領・プログラム

- 日時 2025年6月28日(土) 13:30~17:30
- 会場 一橋大学東2号館2201室(対面とオンラインの併用を予定)
- 主催 日本歴史学協会/日本学術会議史学委員会/日本学術会議史学委員会アーカイブと社会に関する分科会
- 後援 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会/日本アーカイブズ学会/日本考古学協会
- テーマ **危機にある「戦争関連資料」-歴史的文化遺産として残すために-**
- 趣旨 2025年は日本の終戦から80年を迎える節目の年にあたる。この間に戦争体験者はきわめて少数となり、関係者が遺した記録や遺品・遺物の散逸や、関係した遺構・遺跡等が消滅しかねないことが危惧されている。

「戦争関連資料」には、行政文書をはじめ、個人の体験を記録した日記や手紙のほか、写真・映像・絵画・記念碑・慰霊碑等の多岐にわたるアーカイブズがあり、「語り部」による「証言記録」オーラル・ヒストリーも含まれるが、現状ではそれらの収集・保存・公開が、関係機関において整備されているとはいえない状況にある。

一方で近年は、旧日本軍の軍事施設等が戦争遺跡として注目され、全国各地で文化財に指定する動きや、自治体が都市空襲についての調査委員会を立ち上げ、市民を中心とした空襲の調査研究活動から資料館建設に至ったケースも見られるなど、戦争の記憶を風化させないための新たな動きも始まっている。

「戦争関連資料」や近代以降の戦争遺跡は、すべての市民が共有すべき「歴史的文化遺産」であり、これまでも平和博物館や戦争資料館等で保存・公開されてきたが、今まさに保存・利用体制を拡充していくことが喫緊の課題である。

そこで、30回目となる史料保存利用問題シンポジウムでは、「戦争関連資料」を歴史的文化遺産としてどのように残すのかについて考えていきたい。

- 問題提起 東山京子(中京大学社会科学研究所研究員)  
『戦争関連資料』の保存状況について
- 第1報告 山辺昌彦(公益財団法人政治経済研究所主任研究員)  
『戦後80年』で求められること—平和博物館の経緯と課題—
- 第2報告 檜山幸夫(中京大学名誉教授)  
「歴史資料としての戦争記念碑について」
- 第3報告 鈴木 淳(東京大学大学院教授)  
「国史跡『陸軍板橋火薬製造所跡』の保存と活用」(仮)
- 第4報告 手島 仁(群馬地域学研究所代表理事)  
「前橋空襲と復興資料館開館について」

## プログラム

総合司会：大橋幸泰（日本学術会議会員 早稲田大学教授）

13：30～13：35 開会挨拶：若尾政希（日本歴史学協会委員長 一橋大学名誉教授）

13：35～13：40 趣旨説明：新井浩文（日本歴史学協会史料保存利用特別委員会委員長）

13：40～13：55 問題提起：東山京子（中京大学社会科学研究所研究員）

「『戦争関連資料』の保存状況について」

13：55～14：25 第1報告：山辺昌彦（公益財団法人政治経済研究所主任研究員）

「『戦後80年』で求められること—平和博物館の経緯と課題—」

14：25～14：55 第2報告：檜山幸夫（中京大学名誉教授）

「歴史資料としての戦争記念碑について」

14：55～15：25 第3報告：鈴木 淳（東京大学大学院教授）

「国史跡『陸軍板橋火薬製造所跡』の保存と活用」（仮）

15：25～15：55 第4報告：手島 仁（群馬地域学研究所代表理事）

「前橋空襲と復興資料館開館について」

15：55～16：15 休憩

16：15～17：15 パネルディスカッション

パネリスト：東山京子・山辺昌彦・檜山幸夫・鈴木 淳・手島 仁

司会：新井浩文・吉田政博（日本歴史学協会文化財保護特別委員会幹事）

17：15～17：30 閉会挨拶：松本直子（日本学術会議会員 岡山大学教授）